

■令和7年度里海づくりシンポジウム ～未来へつなぐ里海の知と実践～を開催しました！

1月30日(金)、大阪市の難波御堂筋ホールにおいて、「令和7年度 里海づくりシンポジウム『未来へつなぐ里海の知と実践』」を開催しました。本シンポジウムは、環境省が進める「令和の里海づくり」基盤構築支援事業と、環境研究総合推進費(S-23)による科学的知見を結びつけ、地域での実践と研究成果の相乗効果を高めることを目的として開催したものです。当日は、会場およびオンラインを通じて、自治体関係者、研究者、市民、学生など多様な立場の方々にご参加いただきました。

シンポジウム全体を通じて共有されたのは、「里海づくりは、地域の実践と科学が支え合うことで、より確かなものになる」という共通認識でした。行政による制度や支援の枠組み、各地で積み重ねられてきた実践の知恵、そして海の状態を読み解く科学的な視点が、それぞれ単独で存在するのではなく、相互に行き来しながら里海づくりを前に進めていく必要性が強調されました。

前半では、全国各地で進められている里海づくりの取組のなかから、大阪府貝塚市の二色浜、宮城県東松湾、岡山県博多湾の事例が紹介され、自治体、市民団体、企業などが地域の特性を生かしながら、試行錯誤を重ねている様子、活動のなかで観察された海の様子や課題などが共有されました。いずれの事例においても、地域の関係者が主体となり、海との関わりを見直しながら新たな価値を生み出そうとする姿勢が印象的でした。



高城 大臣官房審議官からの冒頭挨拶



西川 海域環境管理室長からの取組と趣旨説明

続く研究紹介では、沿岸環境や生態系を対象とした最新の研究成果が示され、海の中で起きている変化をとらえるために底生生物を調べることの重要性や、そこから見えてくる生息環境の変化や、環境DNAやシミュレーションを用いた生きもの同士のつながり、生態系のつながりを科学的に捉える視点が紹介されました。これらの知見は、里海づくりの現場での判断や取組を支える「土台」となるものであり、研究と実践をつなぐために、一次情報を取得すること、そのなかから何をデジタル化することができるか、そしてそれらを用いた利用可能な最善の科学(Best available science)の認識、さらにはこうした科学に基づいたツールを使いながら多様な主体のネットワークや枠組みを構築するための事例や展望、その重要性が改めて認識されました。

後半の意見交換では、研究者と実践者、行政や企業が一堂に会し、科学的知見をどのように地域の取組に活かしていくかについて率直な議論が行われました。立場の違いを越えた対話を通じて、里海づくりを持続的に進めるためのヒントや課題が共有されました。

また、シンポジウム終盤には、里海づくりポスターデザインコンペティションの環境大臣賞授与式が行われ、次世代による里海への思いや創造的な表現が紹介されました。あわせて実施したポスターセッション・交流会では、

参加者同士が自由に意見を交わし、新たなつながりが生まれる場となりました。

本シンポジウムを通じて、里海づくりは一部の専門家や関係者だけで進めるものではなく、多様な主体が関わり合いながら育てていく取り組みであることが、改めて共有されました。環境省では、今後も地域の取組に寄り添いながら、科学と実践をつなぐ里海づくりを推進してまいります。

●会場の様子



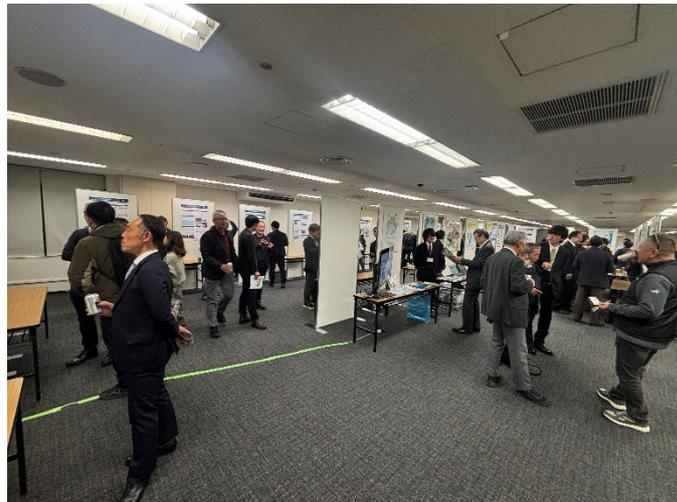
登壇者同士のやりとりの様子



里海づくりポスターデザインコンペティションの表彰



おかげさまでほぼ満席



ポスター会場の様子



森川 環境創造室長による挨拶



研究者と参加者による交流